

大阪大学外国語学部モンゴル語専攻研究室



海外交流

中嶋善輝*

Osaka University, School of Foreign Studies, Mongolian Major

Key Words : Research Institute for World Languages

大阪大学世界言語研究センターモンゴル語研究室は、大阪外国語大学モンゴル語研究室を引き継ぎ、大阪外国語学校以来87年の長きにわたる歴史を持っております。特に作家、司馬遼太郎氏の出身として知られてきましたが、その他にも数多くの国内外で活躍する人士を輩出しております。現在本校のモンゴル語研究室は、専任3人とモンゴル人教員1人、非常勤講師の先生方で担当しております。私は大阪大学と大阪外国語大学統合前の2007年4月にモンゴル語の専任となり、モンゴル文字、古典モンゴル語、モンゴル語語彙の語源やチュルク語(=トルコ系諸言語)との言語接触を取り扱った内容で教育・研究を行っております。この度は、そんなモンゴル語とモンゴル文字の若干の特徴について紹介してみたいと思います。

モンゴル語は、言語構造が類似し多くの語彙的要素を共有するチュルク語及び、満洲・ツングース語と共に、アルタイ諸語に分類されます。モンゴル国と中国・内モンゴルを合わせた日本の国土の7倍ほどの広大な地域を中心に、700万人余りのモンゴル民族によって話されている言語です。語順は、日本語と同じいわゆるSOV型で、名詞類は日本語の「てにをは」に当たる格変化を持ち、動詞の活用も基本的に規則変化するといった点も、日本人にとっては

親しみやすい言語です。造語法が膠着的で、元來語頭にrやlが立たない点も日本語と似ています。昨今、連日メディアをにぎわせている日本の相撲界で活躍するモンゴル人力士の日本語の流暢さには、本当に外国人かと耳を疑うことがあります。日本語もモンゴル人にとって同様になじみやすい言語であることを示している一例と言えましょう。

また、モンゴル語は母音調和という現象が顕著です。これは、1つの語幹が有する母音が、a, i, o, uか e, i, ö, ü (iはどちらにも現れうるが、単独では扱ひ) の2グループに大きく分かれており、その後継に接続する活用語尾や派生接尾辞などの形態素の母音も、語根のそれに順じて付加されるという現象です。例えば、からaab《父》abiin《父の》(+属格) abiinxaa《自分の父の》(+属格+再帰格)と、からeej《母》eejin《母の》(+属格) eejinxee《自分の母の》(+属格+再帰格)を比べてみましょう。《~の》の意味を表わす属格は、母音がiなので、とのどちらにも現れます。しかしながら、その後継に続く《自分の~》を意味する再帰格の母音は、にはaで、にはeで実現されます。動詞の場合も、例えばから、or=《入る》oruul=《入らせる、入れる》(+使役)、からöngör=《過ぎる》öngörüül=《過ぎさせる、過ぎず》(+使役)の様になります。即ち、使役形接尾辞 uul= と üül= が表わす意味は同じですが、動詞語幹 or= は母音がoなので、同じに属する母音を持ったuul=として実現され、öngör= は語幹の母音がöなので、同じに属する母音を持つüül=の音形で実現されるというものです。この様に、モンゴル語の全ての単語は原則的に、のグループか、のグループに分かれることとなります。そして便宜上、の母音からなる単語を男性語、の母音からなる単語を女性語と呼び慣わしてい



*Yoshiteru NAKASHIMA

1971年11月生
大阪外国語大学大学院言語社会研究科
言語社会専攻博士後期課程修了(2006年)
現在・大阪大学世界言語研究センター
(アジア言語文化圏研究部門Iモンゴル語)
講師 博士(言語文化学) モンゴル語学
TEL : 072-730-5261
FAX : 072-730-5261
E-mail : nakas@world-lang.osaka-u.ac.jp

ます。そして次に見るモンゴルの伝統的な文字であるモンゴル文字も、この母音調和で二分されるモンゴル語語彙の特徴を巧みに観察して得た、ある種経済的な表記体系を持っている点が興味深いです。

モンゴル文字は音素文字体系で、起源的には古代メソポタミアを中心に用いられたアラム文字に由来します。現代のアラビア文字同様、アルファベットは語頭形、語中形、語末形を持ちます(また、一部の文字には独立形があります)。例えば、aは「」(語頭形)、「」(語中形)、「」(語末形)、「」(独立形)となります。また、eは「」,「」,「」,「」となっています。さて、ここで気付くのは、aとeの語中形、語末形、独立形がそれぞれ同じ形をしている点です。なぜ書き分けられないのか。実はここに、先に述べたモンゴル語の持つ徹底した母音調和の原理に則った、綴り上の省エネがなされています。即ち、母音調和により、aで始まる単語内にeが混在することは、原則ありません。従って、語頭がaと識別できている以上、語中形も語末形も独立形も、全てaと読まれるべきものです。よって、語頭以外の字形は全てeと共用でよい、というわけです。

ただ、子音で始まる単語の場合、aとeは語頭形を取れません。語中形、語末形、独立形でしか現れないので、区別できないことも少なくありません。しかしながら、識別の方法もいくつかあります。例えば、nara《太陽》とnere《名前》は、そのまま綴れば共にとなるところです。ところが、rの語中形「」にaの語末形「」を付したは《太陽》を、そしてrの語末形「」にeの独立形「」を用いたは《名前》を表わすということが正書法上決まっています。また、もう一例挙げると、モンゴル国のロシア文字で綴る正書法で、цагаан [tsaɣa:n]《白い》とцэгээн [tsege:n]《青白い》として書く語中の(г)は同じ文字です。しかし、モンゴル文字でこの(г)に相当する文字は、男性語中の形と女性語中の形が、本来的に別の文字

で書き表わされます。男性語の語中の「」を、女性語の語中の「」を用います。よって、それぞれ, という異なった見かけの綴りになります。この様に、モンゴル文字の文面は、モンゴル語自体の特性とモンゴル文字本来の字形が絶妙に組み合わせられることで、識別符号なども最低限に抑えられ、全体的にすっきりとした体裁になっています。

モンゴル文字は、13世紀以来モンゴルの民族文字として長らく使われてきました。モンゴル民族は遊牧民としては例外的と言っていいほど多くの文献資料を古くから残してきており、そのかなりのものがこのモンゴル文字で綴られています。モンゴル(人民共和)国では一時、1940年代に完全にロシア文字に切り替えられたことがあります。中国側の内モンゴルでは、今日まで800年余りにわたり途絶えることなく用いられてきました。今日、モンゴル国でも、民主化の中でモンゴル文字は再び復活され、学校教育も行われています。なお、モンゴル文字は縦書きしますが、それは古えのシルクロードで活躍したソグド人のソグド文字の綴り方に遡ります。元々右から左に横へ綴って下へ改行していたものを、90度左へ倒し、縦にした様なものです。よって、改行の方向は日本語の縦書きの場合とは全く逆で、右改行になります。目下Windowsを用いたパソコン入力では、モンゴル文字文章は右改行できないようです(ただ、本年中に可能になるらしいのですが)。従って、私などは日本語の縦書きの要領で、つまり左改行でモンゴル文字を入力した後、行ごとに手動で切り貼りをしながら前後総入れ替えをし、モンゴル文字本来の正しい行送りに改めています。

この度、『生産と技術』への寄稿ということで、特にモンゴル語とモンゴル文字に着目し、その特性とそれを生かした綴り字上の巧みな省エネ法について述べさせて頂きました。以下に、モンゴル文字とロシア文字で本文のモンゴル語要約を付します。

